13. てんかんの局所脳血流検査

清水　勅君　星　博昭　大西　隆
長町　茂樹　陣之内正史　渡邊　克司
（宮崎医大・放）

てんかんの焦点は通常脳波や臨床症状などによって決定されることが多く，X線CTやMRIなどの画像による診断は困難である．しかし，脳波では深部に病巣が存在する場合，その焦点を正確に検出する率は低いと言われている．

今回われわれはてんかん患者20例を対象にIMP-SPECTを施行し臨床症状や脳波などと比較検討を行った．IMP陽性率は部分発作が92％全般発作が63％で，陽性の症例では1例平均約3か所に集積異常を認めた．なお集積異常はいずれも低集積，すなわち脳血流の低下であった．臨床症状との比較では一致例が9例，不一致が3例でこの3症例はいずれも側頭葉てんかんであった．脳波との比較では脳波の陽性率55％に対しIMPは80％と高率で，20症例中にIMPが陰性で脳波陽性の症例は1例も認めなかった．

14. Crossed Cerebellar Diaschisis 様所見を呈した後交通動脈瘤の1症例

伊豆永浩志　冨口　静二　仏坂　博正
原　正史　坂本　祐二　古嶋　昭博
高橋　睦正　（熊本大・放）
諸木　浩一　永広　信二　生塩　之敬
（同・脳外）

今回われわれは，後交通動脈瘤による大脳脚部の圧排により対側小脳の血流低下をきたしたと思われる症例を経験したので報告する．

症例は35歳女性で，右上下肢の筋力低下を主訴として近医を受診し，CT，MRIより脳動脈瘤を疑われて，本院脳外科入院となった．MRI上動脈瘤による中脳の左前方よりの圧排が認められ，血管造影で左後交通動脈に巨大動脈瘤が証明された．^{123}I-IMPによるSPECT上，右小脳に半球血流の低下が認められ，皮質橋路の圧排による伝導路の抑制が原因かと考えられた．

15. 悪性黒色腫の ^{123}I-IMP シンチグラフィ

新野　順　木下　博史　林　邦昭
（長崎大・放）
廣瀬　寮二　（同・皮膚）

われわれは，最近2年4か月間に，悪性黒色腫の患者18例に，IMP，およびガリウムシンチグラフィを施行した．平均年齢は63歳．原発巣は，IMPで4/9，ガリウムで1/11が陽性であった．また4例に転移巣が発見され，こちらはIMPで3/4，ガリウムで3/3が陽性であった．

本症では，転移巣の早期検出が，シンチグラフィに期待される．IMPとガリウムを比べると，われわれの症例では，いずれが勝るか症例により一定しておらず，一方，生理的集積と重なった部位は，IMP，ガリウムとも弱点と言えた．ガリウムシンチとあわせ，IMPシンチは，術後，積極的に行っていくべき検査であると考えた．

16. ^{123}I-IMP 経直腸投与法によるラットの門脈循環の検討

隈部　力　森田誠一郎　石橋　正敏
野村　保史　船津　和宏　平山　貴紳
吉居　俊朗　高橋　一之　大竹　久
（久留米大・放）
梅崎　典良　（同・RI施設）

^{123}I-IMPは，脳以外に，肺，肝臓でも捕捉されることより，経直腸投与法による門脈シンチグラフィが可能である．今回，ラットを用いて，経直腸投与法による下腸間膜静脈経由の門脈循環の検討を行った．対象は正常ラットおよび門脈結紮モデルである．実験の結果，門脈結紮群では，正常群に比して，結紮の程度により肝臓での捕捉が減少し，直腸から減少したカウントと肝臓カウントより求めたシャント率に差が認められた．

Presented by Medical*Online